

群馬県中之条盆地の地理学的考察

— とくに地形及び土地利用について —

上 田 園 子

中之条盆地は、山田川、名久田川が吾妻川に合流する付近に発達したほぼ長方形の盆地で、北西部は三国山脈外縁山地、北東部は切ヶ久保山地、南部を榛名山、東部を小野子山、子持山などに囲まれ、標高300～800mにある。

中之条盆地中央部には、高位のものから順に蕨原面、成田原面、中之条面、伊勢町面の4段の河岸段丘が明瞭に発達し、東部には中山盆地が発達し、これらはいずれも中之条湖成層が浸食されていく過程で形成されたものである。

中之条湖成層を堆積した古中之条湖は、湖成層の分布などから面積100km²、湖面標高約550m、水深200m以上であったと考えられ、榛名山あるいは小野子山の火山活動による堰止湖として形成されたものである。

中之条盆地の4段の河岸段丘のうち、蕨原面は下部ローム層も厚く堆積しているため、桐生川、飛騨川沿岸の段丘とともに関東地方の中でかなり古い地形面に属するものである。

河岸段丘と山地との間には、稜線高度に定高性のない山地とも丘陵地とも思われる山地性丘陵地が広範に分布する。基盤第三系の変位から、第三紀層堆積後に、撓曲運動が行なわれたものと解釈した。この地盤運動は、現在の地形面の高度分布にも影響をもっているようであり、局部的基準面に従って形成された斜面が盆地に向っては低高度の400m、北に向っては高い高度が連続的に分布している。

これらの地形面及び切峯面図、地質図などを参照して、中之条盆地及び周辺地域を6地形区に分類し（Ⅰ 中之条盆地、Ⅱ 中山盆地、Ⅲ 吾妻川谷底及び段丘、Ⅳ 山地性丘陵地、Ⅴ 火山、Ⅵ 山地）、これらの地形区と土地利用型の関連を考察した。

中之条盆地の集落毎の土地利用型を類型化する指標として、水田率及び桑園率を用い、中之条盆地の94集落をA～Iまでの9土地利用型に分類した。

Ⅰ 中之条盆地地形区は、段丘平坦面が広く発達し、又、農業用水路も縦横に走っているため水田率が非常に高く、土地利用型はA又はB型となっている。中之条盆地地形区辺縁部では、河岸段丘面に火山や山地が迫っているため水田率はやや低く、桑園率の大きいE型となっている。

土地利用型	水田率%	桑園率
A	50以上	
B	40~50	0~20
C	40~50	20~30
D	30~40	10~20
E	30~40	20~40
F	20~30	0~20
G	20~30	20~30
H	0~20	0~20
I	0~20	20~40

II 中山盆地地形区では、盆地内に丘陵地や段丘面が点在するので水田率は低く、又、タバコ栽培が盛んで、養蚕と共存していくこともあり、桑園率も低いF型を示している。

IV 山地性丘陵地地形区では、凹地が水田として僅かに利用され、斜面は畑や桑園として利用されているので、水田率・桑園率がほぼ同率を占めるG型となっている。

V 火山山麓やIV山地地形区にある開拓地は、戦後まで広大な公有の未利用地が残っており、又、水利も悪いので主畜農業を行なう農家が多く、牧草畑、飼料用作物畑などが大きな割合を占めるため、水田率・桑園率ともに低いH型を示している。

以上のように、地形区と土地利用型が非常によく一致することが判明した。これらを決定する因子としては、地形の傾斜の大小、広い平坦面の有無、水利の良悪、1戸当り耕地面積の大小、経営主体が耕種であるか養蚕（養蚕も含む）であるかなどが考えられる。

深雪地飯山市の地理学的考察

内田 美枝子

本論文は、長野県飯山市をフィールドとして、本市での積雪の分布、土地利用と農業生産、人口減少の実態を中心に調査し、その間に見られる関連性を考察することを目的とした。論文構成は次の通りである。

序 第一章 飯山市概観 第二章 自然条件 人口減少の実態 第四章 農業 第五章 積雪 — 農業生産性 — 人口減少の関連について

要約 おわりに

要約

1 長野県飯山市は、新潟の豪雪地帯に続く豪雪地であり、多い所では3mを越す積雪があり、南隣りの中野市とも1m以上の違いがある。市域内でも積雪の量が違い、北部の岡山、太田などに行く程多くなり、積雪期間も長く、東西では西の関田山脈に近づく程多くなっている。気温は逆に盆地底程寒冷になっていて、北部の峡谷に入るとかえって寒気はゆるくなる。